HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ケインズ『一般理論』私注　賃金基金説の系譜について(3)
Author(s)	白井, 孝昌
Citation	經濟學研究, 34(3), 152-173
Issue Date	1984-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31662
Type	bulletin (article)
File Information	34(3)_P152-173.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学研究 34-3
北海道大学 1984. 12

<研究ノート> ケインズ『一般理論』私注

賃金基金説の系譜について (3)

白井孝昌

I

ジョン・ステュアート・ミルは1853～4年頃に書き始めた『自叙伝』の中で，父親ジェイムズの著書『経済学綱要』(1821年初版刊行）を「書かれた当初は非常に有益な書物であったが，しかし，いまではもうそのはたらきをとうに終えてしまっている」書物であると評したのであった。今日，経済学者たちのあいだでは，ジェイムズ・ミルはリカードの『経済学および課税の原理』(1817年)の誕生の産婆役をつとめそうして，その後はリカード経済学の伝道者をつとめたことで知られている。彼の『経済学綱要』はその伝道の書であったわけで，息子のジョンの上記の評は，リカード経済学の伝道期の終焉にともない，この書物の役割も終わったことを告げたものと受け取られるであろう。

ジョン・ステュアート・ミルの《父親の影像》(father figure) が，圧倒的な父親の影響力にもかかわらず，ジェイムズ・ミルのみならず，ベンサムやリカードの影響からも形成されていたように，ジョン・メイナード・ケインズのそれも，父親ジョン・ネヴィル・ケインズに加えて，アルフレッド・マーシャルの影響を強く受けていたように思われる。彼の父ネヴィルの万事に控え目な性格を考え合わせると，ケインズの場合には，ミルの場合以上に，実父以外の人々の影響力が強くなりえたとも思われる。こうして，ケインズにとってマーシャルの諸著作は彼の《父親の影像》を象徴するものであったと考えることができるであろう。このような見地に立つとき，ケインズが人物評伝「アルフレッド・マーシャル：1842～1924年」の第 VI 節においてマーシャル夫妻の共著『産業の経済学』[1] (1879年) について述べた言葉は，ジョン・ステュアート・ミルが『経済学綱要』に対してもらした上記の評言と好対照を成して興味深いものがある。ケインズはこう述べている。

「後年マーシャルは，この小さな書物に対して非常に薄情になっていた。『原理』刊行の後，彼はこの書物を絶版にし，そして，1892年には同じ表題をつけてあるけれどもほとんど全面的に異なった書物に取り換えてしまったのである。後者は，だいたいにおいて『原理』の簡約版であって，〈『原理』を初学年の学生向きに翻案することを企図したもの〉であった。マーシャルのこのような感情は，私の考えるに，次の事実によるものであったであろう。すなわち，彼の価値の理論は，この書物によって初めて世間に公表されたのであったが，そこでは必然的に簡単かつ不完全な形で論ぜざるをえなかったわけで，しかもこの書物は11年もの間，外部の人々が彼の理論を評価する手がかりのすべてでありつづけたという事実がそれである。この小さな書物を読んだアメリカの経済学者たちと，1887年と1888年にわたって『クオータリー・ジャーナル・オヴ・エコノミックス』誌上で彼が論争したことが，この感情を強化させることになった。……とはいえ，このような感情は，この書物の真価を見誤らせるものである。この書物は能力のある判定者たちの高い賞賛を得た

1) Alfred and Mary P. Marshall, *The Economics of Industry* (London: Macmillan and Co., 1st ed., 1879; 2nd., ed. 1881).

ものであり，それが出版されていた期間の全体を通じて，入手可能な小型の教本としては抜群にすぐれたものであった。初歩的な教本を一冊は持たなければならないものとするならば，この書物がおそらくは，それと同じ時代のものや従前のものと比較して，それまでに書かれた類書のうちの最良のものであったであろう。――フオーセット夫人とか，ジェヴォンズとかの，あるいは，その後の多数の人々のうちの誰の入門書よりもはるかにすぐれていたのである。そのうえ，《労働者の団結，労働組合，労働争議，および協働組合》にかんする第 III 編の後半部分は，これらの重要な諸論題の現代的な方向にかんする満足すべき論述として最初のものであった。」[2)]

ケインズは「同じ表題」と述べているが 1982 年に刊行された新しい書物の表題は正確に言うと『産業の経済学綱要』(*Elements of Economics of Industry*) である。ついでながら，ここで彼が簡単に言及している 1887～8 年の『クオータリー・ジャーナル・オヴ・エコノミックス』誌上の論争は，すでに前々稿で触れた F. A. ウオーカーや S. M. マクヴェインとたたかわされたものであり，その周辺に J. L. ラウフリンやシドニー・ウエッブも加えられて，後期の賃金基金説論争における重要な局面として，やがて詳しく論じる予定のものである。この論争の規模の目安として，主要な論稿を発表順に列挙すると次のようになるであろう。

J. Laurence Laughlin, "Marshall's Theory of Value and Distribution," *The Quarterly Journal of Economics* [以下 *QJE* と略], Vol. 1, No. 2 (January, 1887), pp. 227–232.

Francis A. Waker, "The Source of Business Profit," *QJE*, Vol. 1, No. 3 (April, 1887), pp. 265–228.

Alfred Marshall, "The Theory of Business Profits," *QJE*, Vol. 1, No. 4 (July, 1887), pp. 477–481.

S. M. Macvane, "The Theory of Business Profits," *QJE*, Vol. 2, No. 1 (October, 1887), pp. 1–36.

Sidney Webb, "The Rate of Interest and the Laws of Distribution," *QJE*, Vol. 2, No. 2 (January, 1888), pp. 188–208.

Alfred Marshall, "Wages and Profits," *QJE*, Vol. 2, No. 2 (January, 1888), pp. 218–223.

F. A. Walker, "A Reply to Mr. Macvane: On the Source of Business Profits," *QJE*, Vol. 2, No. 3 (April, 1888), pp. 263–296.

S. M. Macvane, "Business Profits and Wages: A Rejoinder," *QJE*, Vol. 2, No. 4 (July, 1888), pp. 453–468.

Sidney Webb, "The Rate of Interest," *QJE*, Vol. 2, No. 4 (July, 1888), pp. 469–472.

この後，マーシャルは同誌 1888 年 10 月号に「企業利潤と賃金」という表題を付けた通信文を寄せて，この論争を打ち切るのである。その全文を以下に掲げる。

「マクヴェイン氏は貴誌前号の上記の主題にかんする覚え書の序文でこう述べておられる。すなわち，氏の執筆の目的は氏自身の立場を明確にし，そして論争を慎むことにあると。氏がこれら二つの目的の前者を達せられたものとは私には考えられない。氏が後者を達成しておられないことも確実である。というのは，氏はこの主題にかんする私の見解の要約を示し，そうして，その中に誤りを見出そうとしておられるからである。私は貴誌の読者諸氏の忍耐の限度を越えて議論することを望まないので，こう述べるに止めたい。すなわち，私自身によって説明された私の学説を私は固持するものであるが，しかし，マクヴェイン氏によって与えられたその要約を私は受容しない。

アルフレッド・マーシャル」[3)]

2) John Maynard Keynes, *Essays in Biography*, New Edition (London: Rupert Hart-Davis, 1951), pp. 177–178.

3) Alfred Marshall, "Business Profits and Wages," *The Quarterly Journal of Economics*, Vol. 3, No. 1 (October, 1888), p. 109.

マーシャルのこのような経験が,『産業の経済学』に対する彼の冷たい態度を増幅させたにちがいないとケインズは推測しているのであるが，マーシャルの態度の基盤をなすものは，ケインズが人物評伝「アルフレッド・マーシャル」の第 I 節で提示した主旋律，すなわち，父親ウイリアム・マーシャルから受け継いだ《女性に対する横柄さ》(masterfulness towards women)[4] に求められる。『産業の経済学』は，当初，彼の妻メアリー・ペイリーの著書として書き始められたが，彼がそれを手伝っているうちに，いつの間にか彼自身が事実上の著者になり代わってしまったのである。そして，名実ともに彼自身の著書である『経済学原理』の刊行後，直ちに『産業の経済学』を絶版にするとともに，彼がこの書物を回収廃棄するに当たってとったやり口がきわめて徹底したものであったことについては，彼の甥で，後に彼の『経済学原理』第9(校合) 版の編集の任に当たった C. W. ギルボウの証言がある。彼はこう述べる。

「1890 年にマーシャルが私の父（彼の義弟）に彼の『経済学原理』の初版本を贈ったとき，彼は以前に私の父に贈った『産業の経済学』を廃棄するので返却するようにと要求した。田舎の教区牧師をしていた私の父は経済学者ではなかったので，この交換によって何となく得をしたような気分でいたものであった。」[5]

このようにして抹殺された「小さな書物」に対して，メイナード・ケインズが愛惜の情を抱いていたことは，先に引用した一節からも汲み取ることができるであろう。もっともその一節を書いた時のケインズは，まだようやく『貨幣改革論』を公けにしたばかりで，彼の貨幣にかかわる思想の発展の過程を，ジョン・ステュアート・ミルの精神の発展過程になぞらえて言えば，いわゆる「第1期」にあったわけで[6]，ミルが父親ジェイムズの『経済学綱要』を評した時の彼の境地とは，大きな相違が認められなければならない。とはいうものの，彼の『一般理論』を世に問うて，いわば「第3期」を経過した後も，おそらく,「律義な」(royal)[7] メイナードは，この「小さな書物」に対する愛惜の情を持ち続けていたであろうと思われる。こうして，それぞれ二つの小さな書物に対するミルとケインズの態度のあいだには，やはり，顕著な対照が見出される。

II

今日，諸分野の研究家たちがジェイムズ・ミルの経歴に触れるとき必ず典拠とする伝記は，いまだにアレキサンダー・ベインが1882年に著したものである。[8] たとえば，ドナルド・ウィンチが編集した『ジェイムズ・ミル経済学選

4) J. M. Keynes, *op. cit.*, p. 129.

5) Alfred Marshall, *Principles of Economics*, Ninth (variorum) edition with annotations by C. W. Guillebaud (London: Macmillan, 1961), Vol. II: Notes, p. 12 n. c.

6)『貨幣改革論』の時期のケインズを，精神の発展段階の第1期にあったミルになぞらえて見ることには，若干の異論が唱えられるかもしれない。たとえば，1923年末にこの書物の贈呈を受けたマーシャルからケインズに宛た礼状には，こう述べられていたからである。すなわち，「年を経るにつれて，一つの国際通貨がなくてはならず，そして――それ自体としては馬鹿げた――金は，価値の《自然的》代表物であるという所信が，りっぱにその役割を果たしてきているということはますます明白なことに思われてきます」と。しかしながら，この所信に理性の光を当てるケインズの立場が若き日のマーシャルのそれにほかならないこと，そして，そのような『貨幣改革論』をマーシャルが暖かく受け容れていたことを考えると，ケインズはまだ反動期としての第2期には入っていなかったように思われる。この点については，拙稿「ケインズとマーシャル――イギリス・ケンブリッジ学派の伝統」,『経済セミナー』(ケインズ生誕百年特別号，1983年4月刊)，pp. 165-171，で触れたことがある。

7) ケインズの性格には「律義な」(royal) 側面と「反抗的な」(revolutional) 側面とがあって，それらが彼の生涯の諸局面で交替的に顕われているが，その後者の側面が，ある程度，リットン・ストレイチーの影響を受けたものであることは明らかである。このテーマについては，とうてい満足できるものではないが，多少論じたことがある。拙稿「もうひとつのケインズ像」,『経済セミナー』(1982年6月号)，pp. 50-53.

8) Alexander Bain, *James Mill: A Biography* (London: Longmans Green, 1882; reprinted, New York: Augustus M. Kelly, 1966)。ちな

集』[9] には非常によくできた「伝記的素描」が収められてあるが，ウィンチは近年論じられた若干の解釈上の問題の説明をとり入れてはいるけれども，主要な資料とその組み立ての基本的骨格は，やはりベインの伝記に依拠しているのである。以下，われわれもこの線に沿ってジェイムズ・ミルの経歴を概観し，彼の『経済学綱要』の成立事情を明らかにしよう。また，前稿におけるジョン・ステュアート・ミルの『経済学原理』の成立過程の説明は，主として，彼の『自叙伝』に基づいて行なわれたが，それは彼の精神的発展過程の記述を主題として主観的性格を強く帯びたものであり，より客観的な事実に基づく議論が少なかったので，本稿の以下の説明はその補いをつけることも副次的なねらいとしている。

18世紀の偉大な思想家デイヴィッド・ヒュームやアダム・スミスと同じく，ジェイムズ・ミルはスコットランドの出身で，1773年4月6日にモントローズ (Montrose) にほど近いロギー・パート (Logie Pert) 教区で生まれた。彼の父親ジェイムズのもとの姓はミルン (Milne) であり，靴直し (cobbler)[10] を業としていたが，他にわずかながら家作を有していた。母のイザベル (Isabel) の旧姓はフェントン (Fenton) で農民の出であるが，《ダーバヴィル家のテス》のように栄光に彩られた言い伝えを背景に持つ家で，彼女はエディンバラに女中奉公に出て，17歳のときジェイムズ・ミルンと結婚した。野心的な彼女は陳腐な姓であったミルンをミルに改め，長男のジェイムズに期待をかけた。息子のジェイムズ・ミルは，彼女の激励に応えて，自己の向上に専心したが，彼はこの姿勢を彼の全生涯にわたって堅持する。モントローズ・アカデミーに学んだ後，1790年にジョン・ステュアート卿 (Sir John Stuart) と，とりわけ，ジェイン・ステュアート夫人 (Lady Jane Stuart) の強い後援を得てエディンバラ大学に進むのである。この間の事情については，後年ロンドンでできた友人フランシス・プレイスの質問に答えたジェイムズ・ミル自身の書簡があるので，これを引用してみよう。彼はこう述べている。

「私が大学に進む時期が来たとき，私の父は私をアバーディーンにやるつもりでした。そこはエディンバラよりも近く，また費用も安くあがるからでした。しかしながら，ジョン卿とジェイン夫人は私を，より名声の高いエディンバラにやらせるべきであると強く主張なさいました。そうして，お二人が私の後見をして，アバーディーンの場合の費用を超える分はお二人が負担すると申し出られました。私はエディンバラに行ったのですが，その時から，私の父の家に劣らず，お二人のもとで過ごすことが多かったのです。それには有利な点が多くありました。交際の相手も最高の人々でしたし，一人の教育ある人物を得て，私の教育は方向づけられたの

みに，1900年に公刊されたレスリー・スティーヴン『イギリスの功利主義者たち』の第II巻「ジェイムズ・ミル」もベインの伝記を主たる典拠として用いている。スティーヴンはその巻の冒頭の注にこう記している。「ジェイムズ・ミルにかんする主要な典拠は，アバーディーン大学の論理学名誉教授アレクサンダー・ベインによる『ジェイムズ・ミル伝』……である。この書物は非常に多くの資料を収めており，そうして，かなり乾いた書き振りであるが，それは乾いた主人公 (a dry subject) を扱っている(のだからやむをえない)。」Leslie Stephen, *The English Utilitarians*, Vol. II: James Mill (London: Duckworth and Co., 1900), p. 1 n.

9) Donald Winch (ed.), *James Mill: Selected Economic Writings* (Edinburgh and London: Oliver and Boyd Ltd., 1966), I: Biographical Sketch, pp. 1–22.

10) ベインはジェイムズ・ミルンの職業を "cobbler" としているが，スティーヴンは "shoemaker" と書いている (Stephen, *op. cit.*, p. 1)。これらの言葉は同義に用いられているのであって，たかだか2人か3人の徒弟を抱えた靴職人を想定できるならば後者を用いてさしつかえないのかもしれない。スティーヴンとほぼ同じ頃に，やはり後者を用いたものとして，F. Y. エッジワーズがパルグレイヴの『経済学辞典』の第II巻に書いた「ジェイムズ・ミル」の項目がある。エッジワースの主たる典拠も，もちろん，ベインの伝記である。F. Y. Edgeworth, "MILL, JAMES," in R. H. Inglis Palgrave (ed.), *Dictionery of Political Economy*, Vol. II (London: Macmillan, 1900), pp. 755–756.

です。この方はいくつかの分野にわたる教育費を負担して下さったのですが，この方なくしては私がそれらの分野を知ることはなかったにちがいありません。また，町や田舎にある，よく選ばれた蔵書を自由に利用することもできました。こうして，ジョン・ステュアート卿に私が多大のご恩を蒙っていることがおわかりいただけるでしょう。卿には一人子のお嬢様があり，私とほぼ同い齢でしたが，彼女は美しい女姓であるうえに，知性と気質の点においても，私がこれまで知るかぎりで最も完全な人でした。私たちは子供の頃から一緒に育ち，一緒に勉強したのです。そして，私たちのどちらにとっても，おたがいにほとんど最高に仲の良い友だちでした。彼女はウィリアム・フォーブス卿と結婚して，卿との間に6人の子供を産み，そして二・三年前に亡くなりました。彼女の御母上は，悲しみでいまにも崩れそうなお心持で，私にこうお話し下さいました。彼女は，いまわのきわに，私のことを話して，私たちの間に残っているつながりが，けっして断たれることのないようにと，彼女を囲む人々に言い残したそうです。ジョン・ステュアート卿との古い親交についてはこれだけにします。あなたがこのことを知っておかれることはきわめて当を得たことではありますが，しかし，私はそれが他の人々に語られることを望みません。」[11]

このような経験が，妻となる女姓に対してジェイムズ・ミルの抱いていた期待の水準を非常に高いものにしたであろうことは容易に推測できる。それはさておき，当時のスコットランドで，才能に恵まれてはいるが貧しい家に生まれた若者が世に出るための常套手段はスコットランド教会の神職につくことであった。ジェイン・ステュアート夫人は，とりわけ，その道を彼にとらせることを望んだようで，彼もそのために神学の勉強を始めるに先立ってエディンバラ大学でM. A. の学位を取得するための課程を修めるのである。この課程は法学と神学の二つの専門職の準備教育の正規課程であって，当然，ラテン語とギリシャ語の学習に重点が置かれるとともに，道徳哲学の科目もあり，彼はここで道徳哲学講座の教授デュガルド・ステュワート(Dugald Stewart)を通じてアダム・スミスの思想を受け継ぐのである。また，二つの時期に学んだギリシャ語への関心は彼の生涯を通じて持続されるとともに，彼の長子ジョンの教育がまずギリシャ神話への手引きから始められることと，その教育が対話というソクラテス的方法を通じて行なわれることに結びつくのである。

1797年に彼は説教師の資格を取得して大学を去るのであるが，説教師としては成功の見込みがないことが早くから明らかになり，個人教授の収入で暮らさざるをえなかった。こうして，数年間，定職につけないままに29歳になった彼は，1802年に，議会に出るために上京するジョン・スチュアート卿の馬車に便乗して，ロンドンに出るのである。

ロンドンのジェイムズ・ミルは，当初，法曹界に入るか，あるいは法学の個人教授で暮らしを立てることも考えたようで，このことがやがて彼とジェレミー・ベンサムとの出逢いにつながるのであるが，結局，出版業に関係していたスコットランド出身者たちと接触して，ジャーナリズムで身を立てることになった。彼はフリーランスの仕事を少しした後で，1803年に『文芸ジャーナル』(*The Literary Journal*)の編集者として初めて定職を得た。その後の2・3年間の文筆活動は，彼の生涯を通じる活発な文筆活動のなかでもとりわけ活発なものであった。彼はその他の雑誌への寄稿に加えて，『文芸ジャーナル』誌上にも，彼の初期の（すなわち，リカードと出逢う以前の）経済論稿の範疇に加えられる諸論稿を発表するとともに，当時のイギリスの重大問題であった穀物貿易にかんしてパンフレット『穀物の輸出に対する課徴金の不得

11) James Mill to Francis Place, December 7, 1814, quoted in Gralram Wallas, *The Life of Francis Place, 1771-1854* (London: George Allen and Unwin, 1951), pp. 70-71.

策なることにかんするエッセイ』[12] (1804年) を公けにしている。このような，いわば超人的な努力の結果として，1805年頃のミルの年収は500ポンドを超えて，結婚するに十分なものとなっていた。

彼は，その前年，ロンドン市のホクストンで精神異常者の収容施設を経営する寡婦の長女であるハリエット・バロウ (Harriet Burrow) と婚約したのであるが，この時，彼は31歳，そしてハリエットは21歳であった。彼女は健康な膚をした非常に美しい娘であったそうで，この頃ジェイムズが彼女に送り，その後，永年にわたって彼女が保存していた手紙には，彼女に対する彼の気持の「深さとやさしさは……誰もこれ以上のものは抱けないでしょう」[13] と書かれていたことが記録されている。ジェイムズの眼に映ったハリエットは，彼の高い期待に十分に応えうると思われたのであろう。彼らは1805年に結婚し，その翌年に長子のジョンが誕生する。しかしながら，同時に『文芸ジャーナル』は廃刊に追い込まれ，ジェイムズは将来の飛躍に向けて重大な決定を行なう。すなわち，大作『英領インド史』の執筆に精力の大半を集中するために，その他の定収入源をも放棄したのである。この書物を彼は当初3〜4年で完成する予定で決断したのであるが，実際には，12年の歳月が費やされることになった。加えて，彼は結婚後の20年間にわたって妻に9人の子供を産ませるのである。この年々膨れ上がる大家族は彼の結婚生活の前半期において重い財政上の負担になっただけでなく，妻のハリエットを家事と育児に専念させることになった。このことが彼の家庭生活の基調に大きな影響を及ぼしたであろうことは間違いない。ジョンの誕生後1年置きに，長女のウィリー（正式の名は，ジョンス・テュアート卿の一人娘と同じウィルヘルミーナである），次女のクララ，そして三女のハリエット・イザベラと続くのであるが，ジョン・ステュアート・ミルの死後，この三女のハリエットが記した追憶はこの間の事情を十分に反映している。彼女は1873年10月26日付でJ・クロンプトンに宛た手紙で，次のように述べている。

「同じ屋根の下にありながら，ここには北極と南極のように遠く隔たって暮らす夫と妻の実例がございました。それはけっして，あわれな私の母の《あやまち》から出たものではございません。次々と頭数の増えていく家族と，ほんとうにわずかな資産（その結婚の当初はそうでございました）とを抱えた一人の女が《ドイツ人の家政婦》(a German Hausfrau) 以外の何になれたというのでございましょう。……父の大きな欠点は《短気》なことでした。もっとも，私共が子供であった時分に父をそのようにさせたものは，その頃の周囲の状況であると私は信じております。と申しますのは，昔のお友達に対する父の暖い愛情を私共は見知っておりましたし，また後年にいたりまして，末の子供たちには私共とはまったく違ったふうに接していたからでございます。」[14]

ジェイムズ・ミルがベンサムの面識を初めて得たのは1808年のことで，このときベンサムは60歳，そしてミルは35歳であった。フランス人で19世紀イギリス思想の研究家エリー・アルヴィ[15]によれば，二人の出逢いは両者の経歴における転換点をなしたものと見られる。この時点まで博愛主義者ベンサムは，イギリス国内の世間一般には，監獄の改革案『パノプティコン』(*Panopticon*) の著者としてしか知られて

12) *An Essay on the Impolicy of a Bounty on the Exportation of Grain and on the Principles which ought to regulate the Commerce of Grain*, 1804.

13) Bain, *op. cit.*, p. 59.

14) F. A. Hayek, *John Steuart Mill and Harriet Taylor* (London: Routledge and Kegan Paul, 1951), p. 286.

15) Elie Halévy, *The Growth of Philosophic Radicalism* (London: Faber & Faber Ltd., 1952), esp. Part II: The Evolution of the Utilitarian Doctrine from 1789 to 1815, Chapter III: Bentham, James Mill and the Benthamites, §1: The Birth of Radicalism, pp. 251-264.

おらず，しかもこの案は政治の成り行きによって葬り去られることが明白になっていた。失望したベンサムはやがて民主派 (a democrat) に転じるのであるが，しかし，1808年までは保守派 (a Tory) に止っていたのであって，「彼を民主派にするには，彼の生活の中にジェイムズ・ミルが侵入することが必要とされたかに思われる」[16]というのである。近年，ベンサムの伝記を著したマックは，ベンサムがすでに1790年代に議会改革の主題について書いている事実を指摘することによって，アルヴィの見解に批判的な態度を示している[17]。しかしながら，ウィンチはこの批判を「ミルに出逢う前の時期にベンサムが民主派に対して抱いていた反感を過少評価する」ものであるとして，「ベンサムの政治上の見解の発展過程において，ミルが触媒の作用をしたように思われる」[18]と述べて，アルヴィの見解を支持している。ともかくも，ベンサムはトーリー派として既成の貴族的制度を通じて変革がもたらされうると信じた時期を経て，やがてそのヴィジョンに幻滅し，ミルとともに急進主義の道を進んだわけである。

1808年の出逢いはミルにとっても大きな転換点であった。彼はそれ以前に，すでに急進主義的態度を明らかにしていたけれども，依然としてスコットランド道徳哲学と常識の立場に立って《決定論的な功利主義学説》には反対しており，ベンサムとの出逢いの後にはじめて彼は功利主義の側に立ったのである。その間の事情をウィンチはこう説明している。「ジェイムズ・ミルの理想社会……は過大な富，あるいは過度の貧困によってけがされていない教育あるブルジョアジーが支配するところのものであったようである。このような見解はベンサムの考えの中に含まれていたとは考えられず，ミルがスコットランドの社会学的伝統から継承したものであろう。彼は，ミラー，スミス，およびヒュームに従って，財産のより広範囲に及ぶ分配が自由主義的な政治制度と経済的進歩に有利にはたらくと信じた。富（そして，その結果としての権力）が少数者の手に集中する社会は知性の有する諸々の長所や，慎重さと倹約心 (prudence and thrift) の発達にとって不利である。貴族階級の侵食と〈依存的〉社会へ絶えず向かう傾向に対する唯一の対抗力は中産階級の中にある。……功利主義的政策は主として選挙権の拡張と投票制度の導入を通じて，合理性と正義の線に沿って社会を再編成しようとするものであったが，そこにおいて政治制度の改革は唯一のテコであった。ベンサムは，イギリスの法制が有する不確実性と非論理性とを排除することに熱心な法制改革論者として出発した。そのことがベンサムとミルを最初に結びつけることになったのである。……ベンサムに仕える過程でミルが企画した初期の計画の大部分は法制改革にかかわるものであった。その長年にわたる協力の過程において，ミルはこれらの主題にかんする彼の師の多数の著作物を編纂し，また，彼自身も監獄，刑法，法典編纂，および証拠法について多数の著作をものしたのである。」[19]

ミルの家庭の財政上の負担は，彼がベンサムと協力したことによって，ある程度は軽減されたと思われる。ジェイムズとハリエットが結婚したとき，彼女の母バロウ夫人は彼らのためにペントンヴィル (Pentonville) に家を買って住まわせたが，彼らはバロウ夫人に毎年50ポンドの家賃を支払った。ベンサムとの出逢いの頃も彼らはこの家に住んでいたので，ジェイムズはそこから歩いてウエストミンスターのクイーン・スクェアー・プレイスのベンサムの家に行き，彼と夕食を共にしたものであった。ベンサムは，この若くして有能な新しい友人をもっと身近に置くことを望んだ。そうして，1810年には，ミルの一家はクイーン・スクェアーのベンサムの庭の一角の，かつてミルトンのものであったという由緒はあるが古い家に移り住むの

16) *Ibid.*, p. 255.
17) M. P. Mack, *Jeremy Bentham: 1748-1792* (London: Heinemann, 1962), pp. 438-444.
18) Winch, *op. cit.*, p. 11.
19) *Ibid.*, pp. 13-14.

である。しかし，この家は居住に不適であったので，ミル一家は間もなくストーク・ニューイントン (Stoke Newington) に居を移す。ストーク・ニューイントンはロンドン市の北西のはずれで，ウエストミンスターからは最も遠い場所にあたり，ベンサムの希望に照らして考えるとき，ジェイムズ・ミルのこの選択には何か屈折したものを感じないわけにはいかない。並はずれて強烈な独立心と自尊心を抱いていたミルを説き伏せるにはねばり強い勧誘が必要とされたことであろうが，ともかくも1814年にベンサムは再びクイーン・スクェアー・プレイスの一角の別の家にミル一家を住まわせることに成功した。それもまたベンサムの所有する家であったが，ミルがベンサムに支払った家賃は通常の相場の半値に当たるものであったと言われている。1809年の夏，ジェイムズ・ミルは妻のハリエットと長子のジョンを連れ，オクスフォードに近いバロウ・グリーン (Barrow Green) にあるベンサムの別荘で初めてベンサムと生活を共にし，両者の親密な関係が軌道に乗ったのであるが，以後，毎年夏から秋にかけて，あるいは，しばしばもっと長期にわたって両者は田舎で生活を共にすることを慣わしとすることになる。このようにして，ベンサムはミルの手助けを十分に求めることができたし，ミルはミルで『英領インド史』の仕事に集中することができたのである。しかしながら，このような親密な関係に摩擦が生じないわけはなく，いくつかの事件が記録されている。しかし，長い目で見ると，ベンサムはミルを自分にとって不可欠の人物と思い続けたし，ミルは齢老いた師に仕える責任を強く感じていたので，1818年に東インド会社に定職を得て財政上のゆとりを得た後もさらに1830年にいたるまで，クイーン・スクェアー・プレイスに住み続けるのである。

III

われわれは前稿において，ジョン・ステュアート・ミルの『経済学原理』の成立および改訂の過程を，彼の『自叙伝』の記述に基づいて検討したのであるが，その全体的構成，とりわけ編建てのあり方にはほとんど触れるところがなかった。それを検討するためには，すくなくとも，アダム・スミスの『国富論』，リカードの『経済学および課税の原理』，およびジェイムス・ミルの『経済学綱要』を視野に置くだけでなく，ジョン・R. マカロックの『経済学原理』[20]との対比と，そしてアルフレッド・マーシャルの『経済学原理』に及ぼしている影響の検討を必要とするので，本稿にはその余地はないが，とりあえず当面必要なかぎりにおいてそれに触れると，次のようになろう。

ミルの『経済学原理』における編建ては，

第 I 編　生産 (13章)
第 II 編　分配 (16章)
第 III 編　交換 (26章)
第 IV 編　社会的進歩が生産と分配に及ぼす影響 (7章)
第 V 編　政府の影響について (11章)

の5編から成っている。ミルが『自叙伝』の中で「どの章よりも世論に大きな影響を及ぼし……，それは全面的に（テイラー夫人）に負うものである」とした《労働階級の予想される将来にかんして》(On the Probable Futurity of the Labouring Classes) は，第 IV 編の最後に位置するのであるが，ここでは最後の二つの編は措いて，最初の三つの編の関係に触れたい。ミルが生産と分配を分離して論じたのに対して1890年代に発展した限界生産力理論は生産と分配の両法則を統合するものであり，それらが同じメダルの二面をなすことを明らかにしたとは，しばしば述べられてきたところであるが，このことにことさら反対する考えはミル自身にもなかったであろうと思われる。しかしながら，彼は生産と分配との間に自由度のまったくない厳密な一対一の対応関係があるとは考えず，分配問題にはそれに特有の慣習的ならびに制度的の諸

20) J. R. McCulloch, *The Principles of Political Economy* (Edinburgh: Adam and Charles Black, 1st ed., 1825; 2nd ed., 1830; 3rd., 1843; 4th ed., 1849; 5th ed., 1864).

要因の作用を無視することができないと考えたために，分配のために独立の一編を構えたのである。彼がソーントンの批判に対して，いわゆる「撤回」と見られる態度をとった諸事情の背後には，じつはこの認識が一つの大枠としてあったものと考えられる。すなわち,「賃金は……競争もしくは慣習のいずれかによって規制される」が,「……現状では，競争が賃金の主たる規制要因であって，慣習……はそれを修正する要因，すなわち，比較的軽い程度における規制要因であると看做されなければならない」[21] という彼の文章の裏には，分配問題に特有の慣習的ならび制度的の諸要因に対する強い関心が彼自身にとって当然のものとして横たわっているのである。

交換という題目のもとにある第 III 編では，生産と分配の諸法則を前提として価値の理論がまず提示され，次に貨幣をめぐる諸制度とその性質が説明されるとともに，貨幣の理論と価値の理論との関係が論じられて，議論はさらに国際的価値の理論へと進むのである。その中で商品の全般的生産過剰の可能性を検討する第 XIV 章「供給の過剰について」は，この「私注」においてやがてセイ法則を論じるさいに改めて詳しく扱われるであろうが，ここではその章の末尾の一節に注目したい。われわれのここまでの議論は，ジョン・ステュアート・ミルがその『自叙伝』において父親ジェイムズの『経済学綱要』に触れた一節を出発点としてきたのであるが，そこにはこの書物に対するジョンのもう一つの評言が見られるからである。この章の終りで彼は商品の全般的過剰生産が実際に起こりうると考えられる二つの状況を提示して，そのような解釈を必要とするような場合はありえないという自己の信念を示したうえで，全般的過剰生産を不可能とする説と可能とする説についてこう述べている。

「この論点は根本的のものである。それにかんする意見にどのような相違があっても，経済学上の，とりわけその実践的局面の考え方に大きな相違が生じることになる。前者の見解に立つとき，われわれは十分な生産が，可能なかぎりで最善の分配とどのようにして結びつくかを考えなければならないだけですむ。しかし，後者の見解に立てば第3の問題を考えなければならない。――すなわち，生産物に対する市場はどのようにして創り出されうるか，あるいは，生産はどのようにして市場の容量に限定されうるかという問題がそれである。加えて，そのように本質的な自己矛盾を含む理論が無理に割り込んでくるなら，必ずや経済学の核心に混乱が生じ，社会のよりいっそう複雑な経済上のはたらきの多くの部分を明確に考えることすら不可能になろう。このような誤謬は，私の考えるところでは，前に言及した三人のすぐれた経済学者たち，すなわちマルサス，チャーマズ，およびシスモンディの理論体系にとって，一つの体系と見るかぎりで，致命的なものであった。彼らは皆，経済学における初歩的な諸理論のいくつかを，じつにみごとに考察し，また説明しているが，しかし，これら初歩的な諸理論と経済学におけるもっと難かしい部分との間には，この致命的な誤った観念が一筋の光をも透すことのないヴェールのようにひろがっているのである。ましてや，この同じ混乱した観念が，彼らよりも劣る頭脳を持つ人々の思索の中に絶えず現われ出でて，それを混乱させている。この事実に注意を喚起した二人の卓越した人の名をここで挙げるのは当を得たことであろう。すなわち，この最も重要な論点を真理の光の中に持ち込んだ功績は，主として，大陸にあってはかの賢人 J. B. セイと，わが国においては［ジェイムズ］ミル氏とに帰するのである。氏は（その『経済学綱要』の中でこの主題に対して決定的な説明を加えただけでなく）初期のパンフレットの中で，非常に強く，かつ明確に，この正しい学説を提示した。このパンフレットは当時行

21) John Stuart Mill, *Principles of Political Economy* (London: Longmans, Green, and Co.; Ashley ed.. 1909), Bk. II, Ch. XI, §1, p. 343.

なわれていた論争に触発されて書かれたものであり,『商業を擁護す』[22] と題された。それは彼を著名にさせた著作物の最初のものであって,彼自身もそれをデイヴィッド・リカードとの交友,すなわち,彼の生涯を通じて最も貴重な,そして最も親密な交友に導びくきっかけを作ったものとして,より高く評価していたものである。」[23]

商品の全般的な過剰生産が可能であるとする立場に立つ者が取り組まなければならないものとしてミルが提示した「生産物に対する市場はどのようにして創り出されうるか,あるいは,生産はどのようにして市場の容量に限定されうるか」という問題に対して,ほとんど90年の歳月の後に,ジョン・メイナード・ケインズがいかなる解答を与え,それがどのような評価を受けるにいたったかは,この私注における窮極の課題でなければならないが,われわれはここではそれを見送って,この一節の末尾の文章に注意を向けることにしよう。ジョン・ステュアート・ミルのこの記述に基づいて,ピエロ・スラッファは次のように述べている。

「リカードとジェイムズ・ミルが初めて結びつけられるようになったのは,1808年におけるミルの初期のパンフレット『商業を擁護す』の公刊の結果であった。……しかしながら,リカードがわれわれに語るように,両者が親密になったのは1810年の地金論争に彼が参加した帰結であった。そして,1810年末に彼らの文通が始まるとき,すでに両者が親密な交友関係にあることをわれわれは見出すのである。」[24]

22) James Mill, *Commerce Defended: An answer to the arguments by which Mr Spence, Mr Cobbett, and others have attempted to prove that commerce is not a source of national wealth*, London, 1808.

23) John Stuart Mill, *Principles of Political Economy* (London: Longmans, Green, and Co.; Ashley ed., 1909), pp. 562–503.

24) Piero Sraffa, ed., *The Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol. VI: Letters 1810–1815 (London: Cambridge University Press, 1952), p. xv.

そうして,おそらく,スラッファのこの記述に依ったものと推察されるが,ドナルド・ウィンチはこう述べる。

「彼(ジェイムズ・ミル)は1808年にリカードに初めて会ったが,それは彼が『商業を擁護す』を公刊した帰結であった」[25]と。

もしウィンチがスラッファに依拠したとするなら,彼がスラッファの文章を読み誤ったことは明白である。スラッファの文章は,ジェイムズ・ミルがリカードに初めて会ったのが1808年であることを,かならずしも意味しない。1808年はミルが『通商を擁護す』を公刊した年であると同時に,彼がベンサムと初めて会った年であって,リカードと会ったのが1808年よりも前でないことは確かであるけれども,それがこの年であったとはスラッファは述べていないのである。

両者の出逢いについてスラッファが依拠するところは,リカードが親友トラウワーに宛た1818年1月26日付の書簡の一節であって,それはジェイムズ・ミルとリカードの交友がある程度親密になった時点についての証拠でしかない。トラウワーはリカードがまだ証券仲買業に従事していた頃の友人で,その頃二人は毎日のように証券取引所で顔を合わし,その喧噪の中でしばしば経済学の話を交わした仲であった。リカードはこの手紙の中で昔時の想い出を語り,その追想はさらにミルとマルサスの二人の親友との出逢いへとひろがるのである。

「君が僕に劣らずアダム・スミスのかの労作と,そして『エディンバラ・レヴュー』誌に載った彼の初期の論文の熱烈な愛読者であることを初めて知ったとき,僕の感じたあの歓びをよく覚えています。僕たちは毎日顔を合わせていたのだけれども,お互いに仕事にかかっていないときの半時間ばかりの談笑にこれらの作品が具合のいい話題を与えてくれました。それ以来のあらゆるできごとが刺戟になって,僕は経済学に多大の関心を払ってきました。まず地金論

25) Winch, *op. cit.*, p. 179.

争，そして次に，僕はミルと，そしてマルサスと親しくなりましたが，それは僕がこの論争に参加した結果なのでした。マルサスと僕の討論は数えきれないくらい行なわれ，そして，彼と僕とで意見の異なるいくつかの点について彼が間違っているということを彼に納得させたいと夢中になっているうちに，経済学のいろいろな部分について僕がそれ以前に行なったよりも深い考察を行なうようになっていったのです。彼を納得させることには失敗してしまい，そして，他の人々を満足させることもできなかったかもしれないけれども，僕は自分自身を納得させたのです。そして今，僕は非常に整合性のある一つの理論を心の中で抱いていると考えているわけです。それを他の人々に伝えることができたらと思って，僕はこの理論を紙の上に書き記そうと企図してきましたが，しかし，作文技法をよく知らないために僕はこの願望を成し遂げないままになっているのです。そして，僕は今あの賛嘆すべき情報伝達手段をあやつる方法を身につけていたらなあと絶望的な気分でいるところです。」[26]

リカードは親友トラウワーに宛てたすべての書簡の書き出しに "My dear Trower," という呼びかけを用いているが，それは両者の親交が最も親密なものであったことを示している。この点からトラウワーとの親交に匹敵するものは，少し遅れてマルサスとの間に成立した交友である。リカードとマルサスの交信は1811年に始まるが，当初，両者の間で用いられていた呼びかけは "My dear Sir," であって，これはきわめて形式ばったものである。両者の交信期間を通じてマルサスはハーフォドシャーのヘイリベリにあるイースト・インディア・カレッジの歴史および経済学の教授であり，このカレッジの中に居住していたから，リカードは週末にヘイリベリを訪れることがあり，マルサスはロンドンのリカードの家に逗留することがあった。1819年にマルサスがロンドンに出かけてリカードと共に過ごした後で，ヘイリベリからリカードに宛た9月10日付の礼状の中で，彼は初めて "My dear Ricardo," という呼びかけを用いた。[27] 以後，リカードも "My dear Malthus," という呼びかけを用いたのである。

ジェイムズ・ミルとの交信はマルサスとのそれが始まった前年に始まっており，その当初からきわめて親密な内容のものであったけれども，不思議なことに，両者共に最後まで形式ばった "My dear Sir," の呼びかけを用いていることは，心にとめておいてよいであろう。また，『経済学および課税の原理』の完成を一つの終着点とするリカードの思索の発展過程の中で，彼が何よりもまずマルサスとの討論を最も大切なものとして心の中に抱いていたことが，上掲のトラウワー宛の書簡の一節からも十分にうかがわれることも覚えておかなければならない。こうして，われわれは次に，ジェイムズ・ミルとリカードとの間に交わされた書簡を手掛かりにしながら，リカードの『経済学および課税の原理』とジェイムズ・ミルの『経済学綱要』とのかかわりに光を当てることにしよう。

IV

ピエロ・スラッファによれば[28]，経済学に関係するリカード書簡はジェイムズ・ミルとの交信が始められた1810年に端を発する。そして，それはリカードが没する1823年まで続くのであるが，その14年間の主たる文通相手はジェイムズ・ミル，マルサス，トラウワー，およびマカロックに加えて，前4者にくらべれば文通頻度は非常に少いけれどもジャン・バティスト・セイの5人とすることができる。この期間におけるリカード書簡の分布状況を示すためにスラッファが作成した表はきわめて興味深く有益

26) Sraffa, *op. cit.*, Vol. VII: Letters 1816-1818, p. 246.

27) Sraffa, *op. cit.*, Vol. VIII: Letters 1819-June 1821, p. 64.

28) Sraffa, *ibid.*, Vol. VI: Letters 1810-1815, Introductory Notes to the Correspondence, pp. xiii-liii.

主要交信者別に見るリカード書簡の年次分布状態

年次	ミル		マルサス		トラウワー		マカロック		セイ	
	宛	発	宛	発	宛	発	宛	発	宛	発
1810		1								
1811	2	3	7	10						
1812	–	–	3	2						
1813	–	–	6	–	1					
1814	–	4	8	7	1	1			1	
1815	5	5	19	23	2	4			2	2
1816	7	7	10	7	3	6	2	1	–	–
1817	6	4	14	5	7	7	–	–	1	2
1818	10	7	4	4	6	5	2	5	–	–
1819	5	7	2	2	7	5	6	5	–	1
1820	6	6	5	6	7	6	10	7	1	2
1821	7	4	7	6	7	6	8	7	1	1
1822	5	–	1	–	7	1	7	6	1	2
1823	5	1	6	3	6	4	6	4	–	–
累計	58	49	92	75	54	45	41	35	7	10
	107		167		99		76		17	

なものであると思うので，これらの主要文通相手との交信にかかわる部分を抜き出してここに再掲し，ひととおり解説を加えることから始めよう。そうすることによって，ジェイムズ・ミルとリカードとの交友のありようも，おのずと明らかになると思うからである。

スラッファによれば,『リカード全集』に収録することのできなかった書簡の数は全体の10分の1を超えることはないとのことであるからこの表の数字は実際に取り交わされた書簡の分布状態をかなり正確に示すものであると考えてよい。表の最下段にはそれぞれの文通相手との間に交わされた書簡数が集計されているが，これを見るとマルサスとの間の167通が最も多く次にミルとの間の107通，第3位がトラウワーとの間の99通，第4位がマカロックとの間の76通，そして，セイとの間には17通と最も少い。セイとの場合を唯一の例外として，その他の主たる文通相手については，リカードが受領した書簡数よりもリカードが出した書簡数のほうが，かなりの幅で上回わっていることから，これらの交信においてリカードの側の熱意は誰にも劣らない強いものであったことがうかがい知られるであろう。書簡の集計数についてミルの場合とマルサスの場合とを比較するとき，両者の居住地の事情が考慮に入れられなければならない。前節で述べたように，マルサスはこの期間を通じてイースト・インディア・カレッジの教授としてヘイリベリの地に居住していたので，ロンドンに住むリカードとの間で書簡を交わす機会が多かった。それに対して，ミルはリカードと同じくロンドンに住み，直接に会って話す機会がマルサスよりも多くあり，ミルとリカードの間に書簡が交わされたのは彼らがロンドンを離れた夏期（とりわけベンサムと行動を共にしていた年には7月から翌年の1月に及ぶ半年間）に主として限られるのであるから，これらの数字を通年の交信数と看做すなら過少評価になるわけである。このような事情を勘案してミルとの場合の書簡数を2倍してみると（おそらく，それは過大評価になるであろうが），マルサスとミルの順位は逆転する。しかし，その場合でさえも，リカードが『経済学および課税の原理』を書こうとしていた1815年につい

ては，依然として，マルサスとの交信のほうがミルとのそれを上回わることは注目すべき事実である。ミルとの場合よりも1年遅れて1811年に始められるマルサスとの交信は，1815年を頂点とする高まりを見せて，1818年以降は毎年数通のレヴェルに収束し，とりわけ1819年には両者ともに2通の手紙しか書いていないが，このことは両者の交際が疎遠になったことを意味するものではない。両者はしばしば会う機会を得ていたのであり，1819年は互いに "My dear Ricardo," あるいは "My dear Malthus," と呼び交わす間柄になった年であるとは，すでに述べたところである。

旧友トラウワーとの交信はさらに遅れて1813年から始まるが，『経済学および課税の原理』が初めて刊行された1817年以後は毎年6ないし7通ときわめて規則正しい交信をリカードは行なっている。

マカロックとの交信は最も遅く1816年に始まっている。当時マカロックはエディンバラに居住しており，国債の問題にかんする彼の2冊のパンフレットをリカードに贈呈したのが交信の端緒となったのである。しかし，両者の間の実質的な交信はマカロックが『エディンバラ・レヴュー』誌の1818年7月号に『経済学および課税の原理』の書評を書いたことに端を発するのである。以後，リカードが10通の手紙を書いた1820年を頂点として，相互に毎年7通ほどの書簡を交わしている。マカロックはリカードの死の直前の1823年の5月から6月にかけて初めてロンドンにリカードを訪れて，討論を交わす機会を持った。リカードの死後，ロンドンで彼を記念する経済学の連続講義が創設されたが，マカロックは1824年の講師に選任され，その後の著作活動を通じてリカード学派の代表者と看做されるようになったことは周知の事実に属する。

V

リカード書簡が始まる1810年は，すでに述べたように，ミルの一家が初めてウエストミンスターのクイーン・スクェアーのベンサムの住居の傍にある旧い建物に移り住み，またすぐに遠く離れたニューイントン・グリーンへと移転した年でもあった。ジェイムズ・ミルがリカードに宛た最初の書簡には，その年の12月25日付でニューイントン・グリーンから出されたものであることが記録されている。[29] これはベンサムの論集『警鐘：物価について』のデュモンの手になるフランス訳が出版に値するか否かについてリカードの意見を徴したものである。この書簡の中でミルはベンサムの経済学にかんする論集の欠点を卒直に指摘している。それはベンサムとミルとの師弟関係の特質を示唆してきわめて興味深いものであるので，その一部分を引用しておこう。

「あなたにお話ししました論集の最初の部分をお送りします。残りの部分を私が読んでおりますうちに，あなたはこの部分をお読みになることができるわけです。お送りします部分は全体の約3分の1にあたります。——ご覧のように，まだ未完成の状態ではありますけれども，その全体があなたの興味を惹くことでしょう——しかし，それは出版には適さないであろうと私は考えております。若干の点で，それは初歩的に過ぎますし——他の点では難解に過ぎます——前提と結論がわかりやすい順序に並べられておりませんし，その諸見解はかならずしも正しいとはかぎりません。——じっさい，それはこの著者（ベンサム）の散慢な論文の寄せ集めで，よく整理されていませんし，彼がその根底まで追究しないうちに研究をやめてしまった主題（経済学）にかんするものなのです。」[30]

この手紙に対するリカードの返事は[31]，貨幣量の増大が商品の生産量と物価とに及ぼす効果にかんする所信を詳細に述べて，きわめて興味深いものであるが，いずれ論じるのにもっと適した機会があると思われるので，ここではこれ

29) *Ibid.*, p. 14.
30) *Ibid.*, pp. 13-14.
31) *Ibid.*, pp. 14-18.

以上，立ち入らないでおく。

すでに触れたように，1809年の夏に，妻のハリエットと長子のジョンを連れて，バロウ・グリーンにあるベンサムの別荘でベンサム家の人々と共に過ごしたジェイムズ・ミルは，1811年の夏も同じように過ごしている。この年の9月と10月に彼とリカードとの間で取り交わされた書簡はバロウ・グリーンとロンドンを結ぶものであった。その中で議論された問題は地金論争にかんするものである。

1811年後半から1814年夏に至るまでミルとリカードとは共にロンドンに居て，頻繁に会う機会を持ち，しばしば一緒に長時間の散歩に出かけたのである。このような事情によって，前節の表には，この時期における両者の間の書簡が皆無であることが示されている。この時期のリカードの関心はもっぱら貨幣の問題に向けられていたが，同時に，リカードが研究しつつあった利潤の理論も，ミルとの間で議論されていた見込みが大きいとされている。リカードが1813年8月10日および17日付でマルサスに宛てた2通の書簡の中に彼の利潤の理論の構成要素が含まれていることをスラッファが指摘しているとは，G. L. S. タッカーが述べたところであるが[32]，この時期にミルとリカードとの間で利潤の理論が議論されたであろうと推測させるよりよい証拠は，1814年3月2日付でトラウワーからリカードに宛られた書簡である。トラウワーはこう書いている。

「資本の利潤 (profits of Capital) にかんする君の興味深い論集を読む楽しみをミル氏から奪うことを僕は望まないので，感謝を込めて，それらをお返しします。」[33]

スラッファはこの一節に，トラウワーが返送したものはリカードの『利潤にかんするエッセイ』(1815年刊) の初期草稿であろうという注を付している。

32) G. S. L. Tucker, "The Origin of Ricardo's Theory of Profits," *Economica*, N. S., Vol. XXI, No. 84 (November, 1954), p. 320.

33) Sraffa, *op. cit.*, Vol. VI, p. 102.

1814年はミルの一家が再びクイーン・スクェアーのベンサムの住居の傍の以前のものとは別の建物に移り住んだ年で，彼らはそれ以後，1830年に至るまでそこに住み続けるのである。1814年の夏，ベンサムはサマーセット州チャードの近くではあるが，デヴォン州に位置するフォード・アビィ (Ford Abbey) に昔は僧院として使われていた建物を借り入れて，ミルの一家と共に過ごすことになった。それ以後，リカードとの交信は主として7月頃から翌年1月頃の半年間にフォード・アビィから行なわれるのである。この年の8月28日付でフォード・アビィからリカードに書いたジェイムズ・ミルの手紙は，幼少時のジョン・ステュアート・ミルが置かれた状況の一端を示すものとしてきわめて興味深いので，以下に引用してみよう。

「私たちは2日の旅程でフォード・アビィに着きましたが（それは奇跡的な急行ではなく），ソールズベリで1泊とそこの美しい大聖堂を見物してのことです。ここの家の中は空っぽでした。つまり，ここの庭師と老女が1人いるだけでした。ベンサム先生と私は，うちの小さな息子をつれて，他の同行者たちよりも先にここにやって来たのです。それは家主と会うためで，彼の立合いのもとに他の場所では取り決めのできない事柄をこの場所で取り決めることになっていたからです。この家主は私たちよりも先にここに来ていることになっていたのですが，次の日の夕方までやって来ませんでした。さて，これからこの家がどのような場所かをお話しするつもりです。」[34]

この時，ジョン・ステュアート・ミルは8歳の少年で，ベンサムと父親ジェイムズの3人は他の同行者たちがやって来るまでの1週間を，まだ調度もととのわないこの家で共に過ごしたのである。この年の11月24日にジェイムズ・ミルはフォード・アビィからギャトコム・パークの別荘にいるリカードに宛てJ. B. セイを紹介する手紙を書いている。

34) *Ibid.*, pp. 124-125.

「あなたのご親切なお手紙で私は大きな歓びを与えられました。ほんとうのところ，人が自分の敬愛する人びとの意見の中で，かなり高く評価されていることを知って，うれしがらないでいることは容易なことではありません。しかし，何よりもまず，この手紙の用件から書くことにします。――あなたもよくご存知の『経済学』(*Economie Politique*) と題するあのすぐれた書物の著者であるセイ氏がこの島に来ています。あなたと氏が互いに会うことがなかったとしたならば，きわめて遺憾なことになるでしょう。それゆえ，私はあなた方に面会していただく計画に努力して参りました。氏は私の友人の知己なのです。しかし，氏は現在スコットランドに行って，デュガルド・ステュワートや，その地の他の哲学者たちと会っているところです。しかしながら，私はその友人に手紙を書いて，氏が戻って来られる機に（来月の初めになるでしょうが），ギャトコム・パークにあなたを訪問するよう勧めてくれるように頼んであります。」[35]

ギャトコム・パークのリカードは間もなくロンドンのフランシス・プレイスから12月7日付の書簡を受け取るが，それにはこう書かれてあった。

「昨日，私は畏友ミル氏から12月4日付フォード・アビィ発の手紙を受け取りましたが，そのなかで彼はあなたがギャトコム・パークでセイ氏とお会いになることを希望しておられる旨を知らせて参りました。その後，セイ氏と会いましたところ，氏は土旦日の午後4時に駅馬車でロンドンを発つことに同意されました。フォード・アビィから折り返しご通知するのでは間に合わないかと存じますので，以上の事情を直接お知らせするのが適当かと考えたわけでございます。

セイ氏は，どちらかといえば，率直な風貌をした年配の方で，非常にかざり気のない性格と，育ちのよい紳士に特有の気安さを持ち合わせておられます。氏の著書の第1巻の第13章をあなたにご検討いただけますようお願いしてよろしいでしょうか。もちろん，氏が参上するさいにその書物を1冊お持ちいたすことでしょうが，それにかんするご意見はミル氏のほうにお伝え下さればよろしゆうございます。……その章の大部分が無用で，それを削除してもこの書物を損なうことはないように私には思えるのです。」[36]

それ以後の成り行きは同年12月18日付でリカードがマルサスに宛て書いた手紙の中に記されている。そこには，また，資本の利潤をめぐって両者の間で交わされた一連の討論のひとこまもあって，賃金基金説とかかわる部分や，リカードが，セイの著書を読んで得た知見のひとつが示されている部分が含まれているだけでなく，ジェイムズ・ミルの『経済学綱要』が経済学に貢献したと思われる点を評価するうえで見逃すことのできないところもあるので，少し長文にわたるが，2つのパラグラフを除いた残りの全部をここに引用したい。

「(1) このまえお手紙を拝受して以来，家に泊まった友人たちがあっただけでなく，はからずも私が招きを受けて家を離れておりましたので，すぐにお返事を書くことができませんでした。バースへ2度，チェルトナムへ1度と，そしてまた，現在ベンサム氏が住んでおられます古い僧院に行くため，はるばるデヴォン州まで出かけていたのです。彼とミル氏を訪ねるために，私は『経済学』(Economie Politique) の著者であるセイ氏に同行しました――そして，絶えず降り続く雨さえなかったなら，それは非常に楽しい旅になったことでしょう。

(2) セイ氏は，ミル氏の要請を受けて，ロンドンから当地に私を訪ねて来たのです。私たちがたがいに面識を得ることをミル氏が望んでいたからです。セイ氏はこの国を発つ前に，あなたに面会なさる意向でおられます。氏がかつて非常にみごとに書かれたことのある経済学にか

35) *Ibid.*, p. 156.

36) *Ibid.*, p. 160.

んする会話には，氏は加わる気構えでおられるように私には見えませんでした。――そして，じつは，氏の著書の中には，満足できるほどに確立されたとは私にはとうてい考えられない論点が多数あるのです。――しかし，氏はこだわりのない気持のよい人で，私には，学ぶべき所の多くある良い交友の相手であることがわかりました。……

(3) このところ議論を重ねてきました経済学の問題について，私たちは合意に近づいてはいないことを私は感じます。製造業および商業で用いられる資本の利潤 (profits on stock) が必需品のあるいは労働の賃金が支出されるところの対象物 (those objects on which the wages of Labour are expended) の価値の低下ないしは上昇による以外には，いかなる原因によっても恒久的に (permanently) 低下ないしは上昇させられることは滅多にないということを，あなたに承服していただこうと私は努力してきました。資本の蓄積は利潤を低下させる傾向を有します。なぜか。なぜなら，蓄積はすべて，農業における改良を伴なわないかぎり，食糧調達の困難さを増大させるからです。農業の改良を伴なう場合には，蓄積は利潤を低下させる傾向を帯びません。かりに食糧調達の困難さが増大しないとしたなら，利潤は低下しないでしょう。なぜならば，製造業において利潤のあがる生産を限定するものは，賃金の上昇以外に何もないからです。かりに，すべての資本蓄積に伴なって，私たちの島国に新しく肥沃な土地を取り入れることができるものとしましたならば，利潤はけっして低下することはないでしょう。同時に，私は商業あるいは機械によって諸商品が豊富になり，安価になることがあるのを承認します。そして，もし商業あるいは機械などによって，労働の賃金が支出されるところの諸商品の価格が影響を受けるなら，それはそれに応じて利潤を上昇させることでしょう。――しかし，その場合，この島の土地の上で使用される資本が少なくなることも真実となりましょう。というのは，労働に対して支払われる賃金は，その資本の一部分を構成しているからです。

(4) 資本蓄積の帰結として，生産物の割合の低下は資本の所有者 (the owners of stock) の上に全部降りかかるわけではなくて，労働者たちもそれを彼と分け合うのです。支払われる賃金の総額は以前よりも大きくなるでしょう。しかし，各人に支払われる部分は，確実に，多少とも減少することでしょう。――

(5) 穀物にかんしてもわが国が同じ程度に輸出国になっているとしなかったならば，対外通商の拡大はこの国の土地から資本を取り去ることになるであろうということを，私がこれまで考慮に入れていたという覚えはありませんが，その場合にも私の命題は真実となるでしょう。すなわち，資本がこの国から撤去されないかぎり，利潤率 (the rate of profits) が恒久的に上昇することはけっしてありえないというわけです。この原理が，かりに正しいとして，何かの役に立つかどうかには私はこのさい気をつかってはいません。それは，別に考えるべき問題です。――この原理が有用かどうかは，それが真理かどうかとは無関係で，当面，私が確立したいと思うことは後者にかぎられるのです。

(6)《この土地から資本が撤去されると想定することなくしては，欲求の対象物を新規に市場に投入することは，わが国の諸商品の全集合体の価値 (the value of the whole mass of commodities) を，貨幣で計測しようと，あるいは穀物と労働とで計測しようと，ともかくも上昇させるであろう》とあなたは申されますが，私は同意できません。――そして，利潤の増大はどこにも生じないだろうと私が結論しますのは，生産された原材料と，あるいは貨幣と，交換される諸商品の価値が増大することはないであろうと考えるからです。もし諸商品の集合体が増大するならば，それらの交換価値は数量の増大しない物品と比較して低落します。もしその数量を2倍にすると，あるいは，ストッキングを製造する能力を2倍にすると，ストッキン

グの価値はその他のすべての商品と比較して半分に低落します。もし帽子と靴とについて同じ想定をすると，ストッキングと帽子と靴との間には，従前通りの関係が回復されますが，しかし，その他の物品についてはそうなりません。私たちの間で相違する点はここにあると私は考えます。そして，あなたはご自分の見解に有利な諸論点をきっと提出なさるにちがいなく，私はそれらのすべてをすぐにでも聞かせていただきたいと希望しております。

(7) セイ氏は，その著書の新版の第 I 巻99ページで，需要は生産によって規制されるという学説を，私の思うに，きわめて巧［みに］支持しています。需［要］はつねに一つの商品を別の商品と交換すること［なのです］。靴屋はその靴をパンと交換するとき，パンに対する有効需要 (an effective demand) を有しているのであり，同様に，パン屋は靴に対する有効需要を有しているわけです。――そして，パンに対する靴屋の需要が彼の欲求によって限定されるにちがいないことは明らかですけれども，しかし，交換のために提供できる靴を持っている間は，彼はその他の物品に対する有効需要を有しているでありましょう。――そして，もし彼の靴が需要されないとするならば，そのことは彼が営業の正当な原則に従って来なかったことを示すか，あるいは，この社会によって必要とされる商品の製造に，彼の資本と労働を使用して来なかったことを示しているわけです。――彼はもっとよく注意を払うことによって，将来の生産の中でその過誤を修正することができます。蓄積は必然的に生産を増大させ，そして同じように必然的に消費をも増大させます。もし適切な選択が行なわれるならば，生産物の蓄積は，かならず資本の蓄積になることが可能でしょう。そして，それは，穀物あるいは労働で計測して，かならずその費用よりも大きな価値になるでしょう――そして，このことは，わが国の兵士や水夫や家事使用人などのすべてが生産的労働に雇用されたとしても，真理となるであろうと私は考えます。――この点にかんする私たちの間の意見の相違の基盤は，おそらく貨幣価値で考える段階にあるのではないかと思っています。」[37]（各パラグラフの冒頭の番号と傍点は筆者による。）

この手紙のパラグラフ (1) にあるように，リカードはセイの訪問を受けた後，すぐにセイに同行して，はるばるフォード・アビィのベンサムとミルを訪ねている。前掲のフランシス・プレイスの書簡とリカードのこの手紙との日付の間には，わずかに11日の差しかないから，それが非常に突然のことで，リカードがどれほどせわしい思いをしたかは想像するに難くない。この訪問旅行の発案者がベンサムであった旨が，前掲のミルの11月24日付の書簡の未引用部分に述べられてあり，フォード・アビィでの会合についてセイやベンサムが抱いた印象にかんするスラッファの注記が『リカード全集』に収録されているので，それらの参照は読者に委ねるとして，ここでは，経済学の面でのセイに対するリカードの評価が，他の人々のそれよりも低かったように思わせるものがパラグラフ (2) に見られることを注意するにとどめたい。ともかくも，ジェイムズ・ミルの熱意がリカードとセイを結びつける発端となったわけで，両者の交信はこうして1814年末に始められたのである。

VI

パラグラフ (3) の冒頭で，リカードが「このところ議論を重ねてきました経済学の問題」と述べているのは，もちろん，利潤の変化の諸原因，とりわけ資本蓄積の進行が利潤率に及ぼす効果をめぐる問題領域を指している。その討論と思索の成果は，リカードの『利潤にかんするエッセイ』(1815年刊) となって現われるのであるが，1810年頃の地金論争を皮切りにもっぱら貨幣の問題に関心を寄せていた彼がいつ，いかなる動機によって利潤の問題に立ち入るように

37) *Ibid.*, pp. 161-164.

なったかについては，今日までのところ確実な裏付けを得た定説は立てられていない。利潤の説明は窮極において十全な分配理論の確立を要求するから，この問題はリカードの経済学の起源を問うという重要な意味を有する。1950年代の初めに公刊されたスラッファの手になる『リカード全集』は，この問題にも新しい光を当てるものと期待され，たとえば，G. S. L. タッカーは「リカードの利潤の理論の起源」と題する小論文を1954年11月に『エコノミカ』誌上に発表している[38]。彼は利用できる資料に基づいて推測可能な説明の筋書きを，大まかにいって3種ほど提起するのであるが，彼がその行論の中で指摘しているいくつかの事実は，上に引用したリカードの書簡の位置づけを理解するうえできわめて有益であるから，以下，随時，タッカーの論文にも拠りながら説明を続けることにしたい。

スラッファの『リカード全集』に収録されてある書簡を見るかぎりでは，リカードが彼の利潤の理論にはっきりと言及しているのは，マルサスに宛た1813年8月10日付および同月17日付の2通の書簡が最初であるが，その後も論争は継続されて，われわれが上に引用した1814年12月18日付の書簡に至っているわけである。前掲の《主要交信者別に見るリカード書簡の年次分布表》でもわかるように，1813年という年はその当時の主要交信者であるミル，マルサス，およびトラウワーの3人からリカードに宛られた書簡は残存しないことになっている。これは，おそらく受信者側の保管に問題があったわけで，この年のリカードの出した書簡から，たとえばマルサスが実際には何回か手紙を出していたことがわかるのである。とくにマルサスに限っていえば，彼の書簡の欠落は1812年3月から1814年6月まで2年間を越える期間にわたっており，この時期に彼の関心がどこにあり，どのような見解をとっていたかは，すべてリカードの書いた書簡の方から推測されなければならない。そのうえ，リカードが彼の利潤の理論に言及した最初の書簡とされる1813年8月の手紙は，ジェイムズ・ボナーが編集した書簡集[39]の中では1810年のものと判定されていたのであるから，スラッファの『リカード全集』以前におけるリカードの利潤の理論の起源の問題がきわめて混乱したものであったであろうことは想像するに難くない。これら2通の手紙はリカードの利潤の理論の時代的背景にも触れて興味深いので，ここに引用しておこう。

まず1813年8月10日付の書簡でリカードはマルサスにこう述べている。

「さらにくり返し考えてみました結果，私は新規市場の開拓もしくは既存市場の拡張が及ぼす効果についてこれまでに述べた意見を確信するようになっています。戦争以来，わが国の輸出および輸入の名目価値のみならず実質価値が増大してきている事実を承認することは私にも十分にできます。――しかし，それを承認することが，どうしてこの問題についてあなたがおとりになる見解に加担することになるのか私には理解できません。

イギリスは他の諸国の資本を用いて海運業を拡張してきたということはありえます。グァダループ島やマーティニク島から直接にヨーロッパ大陸へ砂糖とコーヒーを輸出しないで，それら植民地の農場経営者たちはこれらの商品をまずイギリスに輸出し，そうして，イギリスから大陸にするということもありえますから。この場合には，わが国の輸出および輸入の諸品目は，イギリス資本を少しも増大させないで，膨張するでしょう。イギリスでは，何か外国の産物に対する嗜好が増大して，何かの国産品の消費を犠牲にするということがあったかもしれません。こうしたことが，わが国の輸出および輸入を再び膨張させるということもあったでしょうが，しかし，そのことは利潤の全般的増大

38) Tucker, *op. cit.*, pp. 320-333.

39) James Bonar, ed., *Letters of David Ricardo to Thomas Robert Malthus, 1810-1823* (Oxford: Clarendon Press, 1887).

も，また繁栄の実質的進行をも証明するものではありません。」[40]

この手紙に対するマルサスからの返書を受け取った後に，リカードは8月17日付の書簡でさらにこう述べている。

「開戦以来，富と繁栄の増進をわれわれが経験してきていることを，私も率先して信じる者です。しかし，このような増進が利潤の増大，あるいはむしろ，利潤率の上昇を伴なってきたにちがいないということは確実ではありません。と申しますのは，そのことがまさに私たちの間で問題になっていることなのですから。しかしながら，長期にわたって，つまり，あなたの申されている期間(スラッファの注によれば，1793年から1813年まで)を通じて，利潤率が上昇してきていることを私は少しも疑っていません。けれども，それが生じてきたのは，わが国と海外との両方で農業のかくも決定的な改良が伴なって起こってきたからなのです。——というのは，フランス革命が食糧生産の増大にとって非常に有利に作用したから，その結果，この利潤率の上昇は私の理論と完全に両立させることができるというわけです。私の結論はこうなります。すなわち，資本の急速な増大が起こってきてはいるが，食糧生産の新しい能力が加わったことによって，それは利子率の低下という形をとって顕われることを妨げられてきたのであると。——」[41]

ここにはリカードの利潤の理論の説明はないけれども，彼がすでに1813年の夏には確固とした利潤の理論に立って議論を進めていることを十分にうかがわせるものがある。われわれがすでに引用しておいた1814年12月18日付のリカードの書簡のパラグラフ(3)以下の記述は，もっと具体的にリカードの理論の特性をあらわしているので，次にそれを検討することにしよう。

パラグラフ(3)においてリカードは彼の利潤にかんする命題をこう述べていた。

「必需品の，あるいは，労働の賃金が支出されるところの対象物の価値の低下ないしは上昇による以外には，いかなる原因によっても，(利潤が)恒久的に低下ないしは上昇させられることは……ない。」

この命題は，換言すれば，リカードの理論の枠組の中では，利潤の全般的水準を恒久的に変化させうる唯一の原因が，必需品，あるいは，労働の賃金が支出されるところの諸商品 (those commodities on which the wages of labour are expended)[42] の価値の変化だけであると考えられていることを示している。すでにピグーの『失業の理論』の基本的枠組の特徴を解説したこの私注の読者はすぐに気づかれることであろうが，リカードの理論の中で用いられている《労働の賃金が支出されるところの諸商品》という基本概念が，ジョン・メイナード・ケインズの言うところの「ピグー教授の便利な用語」[43]，すなわち《賃金財》(wage-goods) と完全に同一の実体を指すものであることは明らかである。もちろん，《労働の賃金が支出されるところの諸商品》という言葉と，そして「貨幣賃金の効用がその価格に依存するところの諸商品」[44] である《賃金財》という用語とが，それぞれに位置づけられているリカードの理論とピグーのそれとの間には1世紀を越える諸事情の推移があるので，それらの言葉とその全体的文脈とのかかわりから生じる含蓄の相違がないはずはなく，したがって，ピグーの理論がどのような意味においてリカード以来のイギリス古典派経済学の伝統を継承しているかについては，もっと立ち入った検討を必要とするのであるが，当面のところ，リカード対マルサスの組み合わせと，そしてピグー対ケインズのそれとの間に色濃い伝統の流れを認めることができるの

40) Sraffa, *op. cit.*, Vol. VI, p. 93.
41) *Ibid.*, pp. 94-95.
42) *Ibid.*, p. 162.
43) John Maynard Keynes, *The General Theory of Employment Interest and Money* (London: Macmillan, 1936), p. 7.
44) *Ibid.*, p. 7.

ではないかという予想，とりわけ，ケインズが彼の言うところの《古典派》の雇用理論の代表として，他の同時代人の誰のものでもなく，ピグーのそれを選び採ったについては，その理論の特性にかかわる実質的な意味があるのではないかという予想を心の片隅にとどめておくことが，以下の議論を進めるうえで有益であろうと思われる。

ところで上掲のリカードの命題は，表面に顕われない彼の理論の中で，利潤という形態での資本家の取得分と，そして賃金という形態での労働者の取得分との間に，何らかの意味において対立的な関係が設定されているであろうことをわれわれに推測させるけれども，その関係が具体的にどのような形のものであるかをリカードのこの書簡の記述だけに基づいて論じるのは早計に過ぎよう。ここまでの所では，労働者の取得分が労働者の賃金の支出を通じて購入される商品の量で計測されるところの《実質賃金》によって把握されていることだけが確実に認められる事実なのである。

他方，リカードはパラグラフ (3) の後半部分で，「資本の蓄積は利潤を低下させる傾向を有」すると述べ，その理由を説明している。彼は，この資本蓄積が製造業の部門で行なわれるものであり，そして，製造業における生産を制約する事情は労働を調達するうえでの困難以外には何もないことを想定する。この書簡の記述だけからはかならずしも断定はできないけれども，製造業では資本蓄積の進行に伴なって労働の調達さえ順調に行けば収穫逓減法則は作用しないと想定されていると推定しても，リカードの議論と整合しないわけではない。リカードの議論の中で，経済全体として収益逓減法則が作用するのは，土地の制約に基礎を置く農業生産のブレーキを通じてである。リカードの時代にあっては，《労働の賃金が支出されるところの諸商品》もしくは《賃金財》の主要部分は農業生産物たる穀物によって占められるとすることが許されよう。そして，農業生産の改良が伴なわないかぎり，《賃金財》生産の増大を可能にする事情は農業部門には望まれず，また，資本蓄積の進行に伴なう製造業部門の生産の拡大は，賃金財の量で計測される労働者の取得分の増大には結びつかず，そうして，それが製造業における労働の調達を困難にして，経済全体としての収益逓減法則の作用を許容させるから，利潤率の低下が生じることになるのであろう。

上の議論の中で，《収穫逓減法則》と《収益逓減法則》の二語がまちまちに用いられているだけでなく，それらが適用されているレヴェルもまちまちに異なっているかのようになっているのは，筆者の不注意によるものではなく，意図的になされたものであることを急いで付け加えておきたい。もちろん，これらの二語はどちらも《the law of diminishing returns》の訳語として用いられているのである。その訳語として，今日《収穫逓減法則》が広く用いられているのは，その作用の火元が生産を土地によって強く制約される農業に認められるとしたリカードの議論に因んだものであると言われている。また《収益逓減法則》の訳語がそれに劣らず広く通用しているのは，リカードの議論が結局のところ製造業で使用される資本の利潤率の低下を説明するものであったことに由来すると見ることができる。今日，この法則を解説する人は，しばしば，生産要素間の円滑な代替を可能とする生産関数の存在を前提して，その関数の一断面の形状によって説明する。たとえば，農業部門に土地と労働という2種類の生産要素を投入し，その結果，1種類の穀物を産出するという関係を想定し，そうして，前二者の生産要素の投入量を独立変数，後者の生産量を従属変数とする解析的な関数でその関係を表わすのである。そして，土地の投入を固定して得られるこの関数の労働投入にかんする微係数を《労働の限界生産物》と呼んで，労働投入量の増大とともにこの《労働の限界生産物》が逓減するとき，《収穫逓減法則》が作用しているというのである。このとき，労働の限界生産物は穀物の

量で測られるものであるから，なるほど《収穫逓減法則》が作用しているわけである。しかしながら，上掲のリカードの書簡からもわかるように，彼の議論はそのような方向に進められているのではない。すなわち，土地を固定されている農業部門で労働投入を増大させたとしたならば，労働の限界生産物が減少するか否かはリカードの問うところではない。彼にとって問題なのは，製造業部門で資本蓄積が進行して生産物の増大が生じるときに，そのことが必然的には農業生産の拡大につながらないような事情が経済全体として認められることなのである。こうして，土地の制約によって逓減するものは農業部門における《労働の限界生産物》ではなくて，製造業部門における資本の利潤率でなければならない。しかも，その理由は製造業部門の《生産関数》の属性としての《収穫逓減法則》などに求めるべきものでないことは，リカードの議論の全体的文脈から明白である。いずれにせよ，リカードは（そしてマーシャルも）今日流布しているような形での《生産関数》を，暗黙のうちといえども前提していたわけではなく，彼の議論を，農業部門にせよ，製造業部門にせよ，あるいはまた両部門を統合した経済全体にせよ，《生産関数》を前提して作り上げられた似てもつかぬ議論の中に押し込もうとすることに問題があるわけである。《生産関数》の存在を前提したうえで《収穫逓減法則》をその関数の形状になぞらえて説明することは簡明な説明の仕方ではあろうけれども，リカードの理論の枠の中で生み出される《収益逓減法則》のありようを正しく説明するものではない。

VII

では，リカードの理論はどのような形で組立てられるのかという問題が直ちに浮かび上がってくるけれども，それは上掲のリカード書簡にのみ依拠するのではなく，すくなくとも1815年に刊行される彼のパンフレット『利潤にかんするエッセイ』の登場を待って論じられなければならない問題であろう。そして，この書簡の中には賃金基金説の系譜を辿るというわれわれの主題との関連できわめて示唆的な言葉が若干含まれているので，とりあえずその点に触れるにとどめておこう。リカードの利潤の理論の詳細は明らかにされていないにしても，その大筋と，それを定式化するうえで肝要な問題点は前節で述べた。上掲書簡のパラグラフ (3) でリカードは引き続き，「かりにすべての資本蓄積に伴なって，私たちの島国に新しく肥沃な土地を取り入れることができるものとしましたならば，利潤はけっして低下することはないでしょう」と述べている。これを裏返せば，資本蓄積の進行に伴なう利潤率の低下は，製造業部門の生産の伸びと農業部門のそれとのアンバランスに求められるということであって，リカードはその論点をこういう形でくり返し述べて強調したのであろう。両部門の生産の伸びのアンバランスが何らかの仕組みを通じて利潤率に結びつけられているものと想定するとき，その結びつきを保持するうえで重要な条件は何であろうかという問いに示唆を与えてくれる文章がパラグラフ (3) の最後を結んでいる。すなわち，「もし商業あるいは機械などによって，労働の賃金が支出されるところの諸商品の価格が影響を受けるなら，それはそれに応じて利潤を上昇させることでしょう。――しかし，その場合，この島の土地の上で使用される資本が少なくなることも真実となりましょう。というのは，労働に対して支払われる賃金は，その資本の一部を構成しているからです」と。たとえば，海外から安い穀物が輸入されるようになったり，あるいは，国内農業に機械が導入されて穀物価格が低下するなら，実質賃金率はおのずと上昇するから，資本家が従前通りの実質賃金率で支払うとするなら，資本家の取得分は増大するというのである。こうして，資本蓄積の進行と利潤率の低下の結びつきを一定に保つためには，《労働の賃金が支出されるところの諸商品》の状態が一定に保たれなくてはならないのである。そし

て，リカードには「労働に対して支払われる賃金が資本の一部分を構成する」という認識もある。

ここでわれわれは前稿で見たジョン・ステュアート・ミルの『経済学原理』における賃金基金説の命題を想い出そう。それはこうであった。

「賃金は……主として，労働の需要と供給に依存する。あるいは，……それは人口と資本との間の釣合に依存する。……そして，資本は流動資本だけを，しかもその全体でさえもなく，そのうちで労働の直接的購入に支出される部分だけを意味する。しかしながら，この部分に，兵士，家事使用人，および，その他のあらゆる不生産的労働者の賃金のように，資本の一部ではないが，労働と引き換えに支払われるすべての基金が付け加えられなければならない。一国の賃金基金と呼ばれてきたところのものの総計を耳慣れた一つの言葉で表わす方法は，不運にして，まったく存在しない。そして，その基金のほとんど全部に近いものを生産的労働の賃金が占めているので，それよりも重要性のない部分を軽く視て，賃金は人口と資本に依存すると述べるのが慣わしとなってきたのである。」[45]

リカードが上掲書簡において「労働に対して支払われる賃金は，その資本の一部分を構成している」と述べたとき，彼の念頭にジョン・ステュアート・ミルのような洗練された含蓄が，《資本》という言葉とともに宿っていたかどうかは確認する術もないけれども，両者の念頭にある観念が《賃金基金》という同一の言葉でくくることができる程度には相似たものであることは否定できないであろう。こうして，賃金基金説の基本的概念は，リカードの分配理論の起源と看做されるところの彼の《利潤の理論》の中に，すでに早くからその構造の要石としてはめ込まれていたことがわかるのである。

1814年12月18日付でリカードがマルサスに送った書簡はパラグラフ (4) 以下にもわれわれの興味を強く惹く記述をいくつか含んでいる。しかし，われわれはすでにこの書簡をめぐって余りにも多くの推測を重ねてしまったようである。このような所業が可能であったということは，われわれの想像力の翼をしばりつけて大地を着実に歩ませるための事実にかんする情報が不足していたということにほかならない。事実を求めて先に進まなければならない時期はすでに来ているようである。次の稿に進むにあたり，われわれの立っている位置を確認しておこう。われわれは，ジョン・ステュアート・ミルの『経済学原理』にある賃金基金説の陳述と，そしてジェイムズ・ミルの『経済学綱要』のそれを比較して，「撤回」以前のジョン・ステュアート・ミルの立場に対して，時間の奥行きのある展望を得るために，『経済学綱要』の成立事情を辿って1814年末の時点に立っているのである。この時，ジェイムズ・ミルはベンサムと共にフォード・アビィに在って，自己の仕事としては『英領インド史』の執筆を第一目標に置いて，たゆみない前進を続けていた。こうして，われわれは1815年に始まり『経済学綱要』の完成に至る一連の諸事情から，次の稿を書き継がなければならないのである。

45) J. S. Mill, *op. cit.*, pp. p. 343-344。訳文は本誌前号，p. 92 (258) から採った。